

# 命をつなぐため 高いところへ



想定外の津波と言われた東日本大震災の教訓から、市では「高台へ逃げる、なければ高台を造る」という「命山構想」を基本に、津波避難タワー建設の計画を進めてきました。そして、平成24年12月に示された県の最新の津波想定高を受け、平成26年3月までに沿岸地域に津波避難タワーを建設しました。

津波避難タワーを含めた各防災施設の運営、備品補充、避難訓練などを通じて、実際に災害が起きた時の被害をできるだけ小さくすることが望まれます。

大きなタワーを目の前にすると、地震発生後すぐにここへ逃げれば命が助かるという安心感が得られます。それと同時に、地震や津波に備えて、今の自分がしておくべき対策が何かということを考えさせられます。

今回の特集は、完成した津波避難タワー、避難路・避難場所、三和防災コミュニケーションセンター、危機管理課内にある防災行政無線親局などの各施設を視察し、現在の南国市における防災対策の現状について取材しました。

## 南国市津波避難タワー

平成23年3月11日の東日本大震災発生から3年半が過ぎました。あの時の衝撃は今でも忘れられません。沿岸地域の方は本当に心配された事でしょう。

南国市では、おおむね5分以内に安全な場所へ避難出来るようにと、今年の3月までに14基の津波避難タワーが完成しました。

タワーは、前浜の伊都多神社（標高12・3～12・7m）を中心として東西約600mごとに設置されていますが、人口の多い所は300mほどの所もあります。波の力でタワーが倒れないように、深い所では37mも杭を打っています。広さや高さはそれぞれ違いますが、基本設計は全て同じで、1人1mの避難スペースを確保しています。全てのタワーに階段とスロープを設置しており、階段は小学校低学年の体格を基準にしています。

設備として太陽光発電によるLED照明（夜間の避難時に活躍）、蓄光ノンスリップ階段、備蓄倉庫、組み立て式トイレ、更衣室スペース、ヘリ救出用スペースなどがあります。



備蓄倉庫には、水や毛布など、津波が引くまでに必要なものが保管されており、震度5弱の揺れにより鍵が自動解除するようになっています。日常の管理は地元の方をお願いしています。

## 三和防災 コミュニケーションセンター

7月2日、私たちは木の香も新しい新築の建物で、山岡正和さん（三和公民館館長）、濱田憲雄さん（浜改田地区防災連合会会長）、西森徹さん（里改田地区防災連合会会長）にお話を伺いました。



築60年以上経っていた旧公民館の建て替えの話は、4～5年ほど前から進んでいたようです。しかし、東日本大震災が起きてから、地震や津波に耐えられるように、そして緊急避難場所としても利用できるようにと、当初1階建てを予定していたものを2階建ての鉄筋コンクリート造に計画が変更になったそうです。1階には広々とした調理実

習室や会議室、2階には舞台付き大ホールがあり、地域の人々が集い、学び合う環境が整備されています。これまでに以上に親しみやすく、使い勝手の良い、地域活性化の中心となる公民館活動が展開されることだろうと、少々羨ましく思いました。

また、消防屯所を併設し、防災倉庫や無線受信用鉄塔・3階への外付け階段・ヘリコプターがホバリングしながら物資を落とすことができる屋上スペースなど、避難所としての機能も大変充実しています。さらに避難所が孤立した時のために、容量6トンの貯水タンクや、太陽光・ディーゼル・LPガスなどによる発電設備を設置することで、住民にとって安全・安心な建物になっていると実感しました。しかし、いつ・どこで・どんな状況の中で起こるか分からないのが震災です。

◎避難タワーや防災コミュニケーションセンターなどの立派な建物ができて、いざという時の行動は個人の責任。各地区の自主防災会を中心に、防災訓練を繰り返し行う中で、問題点を出し合い、一人一人が確認しながら改善していく必要がある。



◎防災訓練に積極的に参加したり、家族で地震が起きた時の行動について話し合ったりすることで、コミュニケーションの数を増やす人が震災に強くなる。

◎震災後、行政の支援はすぐには届かない。緊急避難場所が孤立してしまう恐れもあるため、一人3日分ほどの水と食料は、個人の責任で準備しておかなければならない。

◎どこで地震に遭うかわからないので、自宅周辺だけでなく、自分の行動範囲の避難場所も把握しておく必要がある。

といったお話をお聞きし、「命を守り、命をつなぐ」防災への日頃からの備えの大切さを教えられました。